

シンチでは腫瘍に Ga-67 の集積があり、ABC では多核巨細胞がみられた。また、経過中、腫瘍が急速に腫大してきたため、未分化癌と診断し、3月1日、甲状腺全摘を行った。しかし、組織像は亜急性甲状腺炎であった。「考案および結論」誤診した原因は、各種画像は悪性所見を呈していたこと、炎症反応がなかったこと、甲状腺機能亢進がなかったこと等が上げられる。後に、手術時の血液を検査したところ、赤沈促進、甲状腺機能亢進がみられたことより、当院受診が発症後比較的早期で、典型像を呈しなかったためと考えられる。

3) ACTH 単独欠損症に慢性甲状腺炎を合併した1例

河内 文女・高澤 哲也 (信楽園病院内科)
山田 幸男

症例は62才女性、主婦。主訴は下痢と食欲不振。消化器系の精査のため禁朝食とした所低血糖発作が出現。入院時検査所見で Na 128 mEq/l, Cl 94 mEq/l のため内分泌学的検査を施行。IRI, GH, LH, FSH, PRL, ACTH の基礎値は正常範囲。尿中 17-OHCS 0.7 mg/day, 尿中 17-KS 1.0 mg/day, cortisol 1.5 g/dl. ACTH-Z 連続負荷試験で尿中 17-OHCS, 尿中 17-KS, cortisol は正常反応。インスリン低血糖試験で ACTH と cortisol が低値低反応より ACTH 単独欠損症と診断。TSH 24.9 IU/ml, F-T3 1.59 pg/ml, F-T4 0.46 ng/dl, TGHA・MCHA 25,600 倍より慢性甲状腺炎と診断し、これらの合併例と考えられた。主訴だけでなく、基本的な一般検査結果の検討を忘れてはならないと考え報告した。

4) 正常分娩を経験した empty sella 合併部分的下垂体機能低下症の1例

吉岡 光明・村川 英三 (新潟県立中央病院 内科)
黒木 瑞雄・土田 正 (同 脳外科)
後藤 明・大野 雅弘 (同 産婦人科)

〔症例〕S39年生の女性。H2年1月、第1子出産後、乳汁分泌はなく、嘔気、微熱など体調不良となる。H3年12月、発熱、嘔吐、意識障害出現し、当院入院。精査の結果、二次性副腎不全症と診断。内分泌学的には、ACTH, prolactin の部分的下垂体前葉機能低下症。画像学的には empty sella。ハイドロコルチゾンの補充療法中、第2子を妊娠し、分娩時ハイドロコルチゾンの増量により正常分娩が可能であった。〔考察〕empty sella

の下垂体機能障害としては、プロラクチンの低下は極めて稀である。又 ACTH 欠損症のため分娩時、ハイドロコルチゾンの増量により、母児とも合併症なく、産褥期も順調に経過することができた。

5) 視床下部過誤腫の全摘が有効であった思春期早発症の長期経過

田村 哲郎・本道 洋昭 (新潟大学脳研究所)
田中 隆一 (脳神経外科)

視床下部過誤腫を伴う思春期早発症の治療は過誤腫が全摘できれば有効との報告があるが、長期経過を調べた報告はほとんどない。今回我々は長期経過を観察し、良好な結果を得ている症例を経験したので報告する。

症例は'81. 6. 2. 満期正常分娩で出生した女兒である。生後2ヶ月で性器出血し恥毛をみた。当初腹部腫瘍が疑われ、開腹術により腫大した卵巣の内左側を摘出されたが、症状は改善しなかった。内分泌検査で中枢性思春期早発症が疑われ、画像診断で視床下部過誤腫と診断された。1才9ヶ月で開頭術により全摘された。その後二次性徴は退縮し、経時的な LHRH test では次第に反応しなくなったが、11才3ヶ月初潮発来、12才7ヶ月で E₂ 14 pg/ml, LHRH test で LH は 5.8 から 42.7 mIU/ml に、FSH は 8.5 から 24.1 mIU/ml まで上昇し、よく反応するようになった。本例のように過誤腫の全摘後1度退縮した二次性徴が正常な時期に再び生じたとの報告は1例しかなく貴重であり、長期的にみて摘出術は有効であることが示唆された。

6) 中枢性低塩症候群 (Cerebral Salt Wasting Syndrome) におけるバソプレシン分泌動態

鴨井 久司 (長岡赤十字病院 内科)
外山 孚 (同 脳外科)
山路 徹 (東京大学第三内科)

7) 副腎皮質多発結節性過形成によるクッシング症候群の1例

石黒 卓朗・佐藤 幸示 (県立がんセンター)
伊藤 一寿・筒井 一哉 (新潟病院内科)
渡辺 学 (同 泌尿器科)
根本 啓一・本間 慶一 (同 病理)
樋口 義健 (樋口 医院)

症例は64歳、女性。1993年11月11日、近医にて両側

副腎腫大，満月様顔貌等を指摘され，Cushing 病を疑われたため12月24日に内科入院。ACTH は抑制，cortisol の日内変動は消失していた。デキサメサゾンには抑制されなかった。メトピロン負荷により 17O HCS，17 KS は増加したが，ACTH は抑制された。以上より，ACTH 非依存性の両側副腎皮質過形成による Cushing 症候群と診断した。最近報告されている ACTH 非依存性副腎皮質大結節性過形成，Primary pigmented nodular adrenocortical disease (PPNAD) 或いは Gastrin inhibitory polypeptide (GIP) との関連が示唆され，興味深い。

8) 自然破裂をきたした副腎腫瘍 (Cushing 症候群) の1例

齋藤 俊弘・車田 茂徳
川上 芳明・郷 秀人 (新潟大学泌尿器科)
内山 武司 (水原郷病院 泌尿器科)
植木 一弥 (同 内科)

症例は34歳の女性。1992年頃から顔貌の変化(満月様)に気付いていた。1994年2月22日突然の左背部痛が出現し，2月24日に水原郷病院に入院した。Hb 9.4 g/dl と貧血を認め，CT で左後腹膜血腫と副腎の腫瘍を認めた。2月26日には Hb 5.6 と貧血が進行し，2月27日当科に転入院した。高血圧，低K血症，満月様顔貌を認め，ACTH の低下および cortisol の上昇を認めた。左副腎腫瘍によるクッシング症候群の自然破裂と診断し，2月28日に左副腎摘除術を行った。病理組織学的には副腎皮質腺腫であった。術後 cortisol は正常化し3月13日退院した。クッシング症候群の副腎腺腫が自然破裂を起こした例は我々の検索できた範囲では1例も見当たらず，きわめて稀な症例であった。

9) 軽症高血圧に対する kallikrein 経口剤の効果

一尿中 Na 排出量とプロスタグランディンに対する影響—

中村 宏志・中村 典雄 (中村医院 内科)
中村 隆志 (同 薬局)
伊藤 正毅 (新潟大学第一内科)

【目的】軽症高血圧患者に Kallikrein 経口剤 (Ka 剤) を長期投与した場合に，降圧効果が得られるかと，Na 利尿とプロスタグランディンに対する影響が関係してい

るかにつき検討した。【方法】非肥満の軽症高血圧患者 (収縮期 140~165 mmHg，血圧 90~96 mmHg) 30名を，A群 (コントロール)，B群 (Ka 剤 75 U/日)，C群 (Ka 剤 150 U/日)，各10名に分け，前と1，3ヶ月後に，血圧，尿中 Na，PGE₂ を測定した。【結果】平均血圧は，A群に比して，B群の3ヶ月後，C群の1ヶ月後と3ヶ月後で有意に下降していた。FENa はA群に比して，B群の1ヶ月後，C群の1，3ヶ月後で有意に増加していた。平均血圧と FENa の間には， $r = -0.719$ ($p < 0.001$) の逆相関が認められた。尿中 PGE₂ 排泄量は1，3ヶ月後で，B群，C群ともA群に比して増加傾向を認めた。【結論】軽症高血圧患者に対し Ka 剤を長期投与した場合に降圧効果が得られることが確認され，その機序として，Na 利尿の促進による可能性が高いと考えられた。

10) 高令ラット骨粗鬆症モデルにおけるエストロゲン・プロゲステロンの骨代謝に及ぼす影響

山本 泰明・倉林 工尚
八幡 哲郎・藤巻 和哉 (新潟大学 産科婦人科)
安田 雅弘・織田 憲一
田中 憲一

【目的】プロゲステロンが閉経後早期の骨代謝に及ぼす影響を卵巣摘出した高齢ラットを用いて検討した。

【方法】365日齢 S-D ラットを ① 偽手術 (Sham) 群 ② 卵巣摘出 (OVx) 群 ③ OVx+E 群 ④ OVx+P 群 ⑤ OVx+E+P 群 (各6匹) に分け，Sham あるいは OVx 施行後，③~⑤群は4日毎に Estradiol 0.05 mg または Progesterone 2 mg 皮下注。実験開始時および45日目に DXA 法 (QDR-1000/W) により第2~5腰椎骨密度と血中骨代謝パラメーターを測定，また二重蛍光標識後屠殺，第5腰椎非脱灰標本 Villanueva 骨染色，第4腰椎脱灰標本酒石酸抵抗性酸フォスファターゼ染色し骨形態計測 (実測倍率 304.7 倍) を行った。

【結果】(1)骨密度は OVx 群，OVx+P 群で有意に減少 (2) OVx 群，OVx+P 群，OVx+E+P 群は Sham 群，OVx+E 群と比べ高 ALP の傾向 (3) 骨形態計測では吸収面，破骨細胞数は Sham 群に比べ OVx 群，OVx+P 群で著明に増加，E 群と E+P 群は有意差なし。骨形成速度，二重標識面は Sham 群に比べ OVx 群，OVx+P 群で増加し OVx+E+P 群は OVx+E 群に比べ高値。【結論】高齢ラットに対する卵巣摘出後の P 単独では骨代謝回転の抑制は認められなかった。し